

慎ましい小鳥のさえずりが耳に心地よく響き、カーテンの隙間から漏れるうらかな陽射しがさらなる眠気を誘う。そんな、よく晴れた入学式の日の朝のこと。

『お兄ちゃん、朝だよ。起きて〜』

魅惑の妹ボイスで、早川大吾ははやかわだいごぱっちりと目を覚ました。

『お兄ちゃん、朝だよ。起きて〜』

繰り返される魅惑の妹ボイス。大吾は一つ大きく背伸びをすると、起こしに来てくれた妹に感謝の返事——をせず、枕元にあつた携帯電話を操作し、目覚まし機能をオフに切り替えた。

妹は朝に弱いので、残念ながら起こしに来てくれることは滅多にない。可愛い妹に起こしてもらおうという男の幻想は、この家では発生しないのだ。そのため、大吾はせめて気分だけでも味わおうと妹の声を携帯電話に録音してもらい、こうして目覚まし代わりに使用している。現実はいつも残酷ざんこくなのだ。

ベッドから降りてせつせと制服に着替える。そして、自室を出るとすぐ隣の妹の部屋の

前に立つ。

「佳奈美、朝だぞ。起きろ」

トントン、とノックをしながら部屋の中に向かって声をかける。この段階で妹が目覚めます確率は、大吾の経験からいって五割弱というところだ。

「……………」
しばらく待つてみるが、返答はない。どうやら、今日は残りの五割強の方らしい。

「佳奈美、入るからなく？」

一応、一言そう告げて、部屋の扉を静かに開ける。

中を見ると案の定、妹——早川佳奈美ははやかわかなみベッドの上でその小さい身体を丸めてすやすやと寝息を立てていた。

足音を立てないよう慎重に部屋に入り、ベッドの方へ近づいていく。そして、中腰になりながらそっと佳奈美の寝顔を上から覗き込んだ。

栗色の柔らかそうなショートカットの髪。一六〇センチに満たない小柄な背丈。少し鼻

の低い愛嬌あいぎょうのある顔立ちに、くりくりとした瞳。これで背中に白い羽でも生えていようものなら、拝み倒してしまうこと間違いなし。

俺の妹、マジ天使！

薄く形のいい唇の隙間から漏れる吐息に合わせて発展途上の胸が小さく上下を繰り返し、やや大きめのピンクのパジャマの先からちよこんと出る手が、お気に入りの子犬のぬいぐるみをぎゅゅと抱きかかえている。

やばい。何度見ても可愛すぎる。佳奈美可愛いよ佳奈美！

そんな風に妹の寝顔を見ながら、鼻息を荒くする大吾。

完全無欠の変態であった。

「……っと、見とれている場合じゃないな」

本当ならここで一二〇時間くらいこうしていたいのが、残念ながらそんな時間はない。今日は入学式の準備のため、一足先に家を出ないといけないのである。ここで起こしておかないと、朝に弱い妹は寝坊してしまうかもしれない。

大吾は泣く泣く佳奈美を起こすため、その身体を揺すろうと肩に手をかける。と、

「むっ……!?!」

横を向いて丸まっていた佳奈美が、ころんと寝返りを打って仰向けあおむになる。

その際に着ていたパジャマがはだけ、お腹と可愛いおへそが丸出しになってしまった！

「……………」

じーっと穴があくほど凝視ぎょうしする大吾。

「……って、何をやってるんだ俺は！ これじゃまるで変態じゃないか！」

そして、三〇秒ほどしてからようやく正気を取り戻し、慌てて首を振った。

ちなみに、そんなことをしなくてもとっくに変態である。

「う、ううむ……」

あられない格好のまま寝息を立てる佳奈美を見ながら、大吾は思案する。

ここは、兄として衣服の乱れを直してあげるべきではないだろうか。

このままでは風邪を引いてしまうかもしれないし、もしこの状態で起こしたら、いわれない疑いをかけられてしまう可能性もある。

そう、これはあくまで佳奈美の健康と自己防衛のための行為なのだ。
決してやましい気持ちなどない！ 断じてない！

「……よ、よし……やるか……」

「ごくり、と唾を飲み込んでから、大吾は佳奈美のパジャマに手をかけた。寝息のたびに小さく上下するお腹がすぐ目の前だ。思わず撫で回したくなってしまふ。」

（落ち着け、落ち着くんだ早川大吾……！）

危険な誘惑ゆうわくと懸命けんめいに闘いながら、大吾は震える指先でボタンを留めようとする。

その時、

「お兄……ちゃん……？」

すぐ近くから、寝起きのかすれた声が聞こえてきた。

ぎぎぎぎ、と壊れたブリキ人形のように首を回し、声のした方を見る大吾。

上半身をゆつくりと起こした佳奈美は寝ぼけ眼で目をしばしばさせながら、まず大吾の顔、次にはだけた。ハジヤマ、最後に。ハジヤマにかけられた大吾の手に順次視線を巡らせる。

そして、たっぷりー〇秒は経ってから、

「おおおおおおおお兄ちゃん!?!」

頭から湯気が出てきそうなほど真っ赤な顔で、悲鳴のような叫び声を上げた。

まずい！ 一二〇パーセント勘違いをされている！

「ち、違うんだ佳奈美！ 俺は——」

「だ、だめ！ ひやめ！ ひやだ！ えbせえhbvいhrnq!」

なんとか釈明しようとした大吾だったが、パニック状態の佳奈美は手足をじたばたさせて猛烈な勢いで暴れ始めてしまった。

こうなつては釈明どころではない。まずは落ち着かせないと……！！

「お、落ち着け佳奈美……」

佳奈美を押さえようと大吾がベッドに上がる。が、その途端、

「ふっ……！！」

暴れていた佳奈美の右足が、不運にも大吾の鳩尾を直撃した。

中学時代に水泳部で鍛えられた脚力は半端ではなく、すさまじい激痛にたまらずお腹を押さえて前のめりに倒れ込む。

すると、

ふによんっ

なんだかそんな慎ましくも柔らかい感触に顔面が覆われた。

……なんだろうこれは。倒れた先にクッションでもあったのだろうか。

「はわ、はわわわわ、おに、お、おにい、おお、おにいちゃ……」

すぐ頭上からどもりまくった佳奈美の声が聞こえてくる。一体何があったのだろうか。とりあえず状況を確認しなければ。

大吾は両手をベッドについて身を起「こそうと——

「み、見ちゃダメ~~~~~!!」

したその瞬間、グキリッ、という嫌な音を立てて、大吾の首が強引に横に捻じ曲げられた。

「……かっ……はっ……」

力を失った大吾の身体がベッドから転げ落ちる。

佳奈美はそれを気にする余裕もなくせつせとボタンを留め、パジャマの乱れを直した。

「こ、ごめんねお兄ちゃん。もうこっち見てもいいよ」

えへへ、と照れ笑いを浮かべて佳奈美が大吾の方を見る。が、

「あああっ!!? お、お兄ちゃん!!」

床に力なく横たわる大吾は、白目を剥いて泡を吹いていた。

「お兄ちゃん！ しっかりしてお兄ちゃん！」

慌てて大吾を介抱する佳奈美。

その後、意識が戻るまで一五分近くを要し、大吾は入学式初日の朝から学校まで全力ダッシュを余儀なくされたのであった……。

第一章 佳奈美の高校デビュー大作戦

「俺は妹が大大好きだっつつつ!!」

東京都西部、神奈川県と東京都の境目の辺りに位置する私立五月治学園。さつきじがくえん

その生徒会室で、大吾は拳を突き上げ、声高らかにそう宣言した。

「……………」

同じ部屋で書類のチェックをしていた女子生徒が、ぴたりと手を止める。

そして、おもむろにスカートのポケットから携帯電話を取り出すと、

「もしもし？ 警察ですか？」

「第一章開始一ページから警察沙汰!？」ざた

迷わず一〇番をプッシュした。

「ええ、はい。そうなんです。学校に度し難い変態野郎が不法侵入を……」

「待て！ 俺はこの学校の生徒！ しかも副会長！」

「しかも勝手に副会長を名乗っています」

「待て待て！ お前とペアで立候補したんだから、知ってるはずだよな生徒会長!？」

生徒会室に響く大吾の魂たましいの絶叫ソックル。

女子生徒は仕方ないという風のため息をつく。「間違いでした、すみません」と謝罪して電話を切った。

「志保しほ、お前な……。マジで警察に電話するか普通……?？」

「二人きりの部屋で、クラスメイトが自ら変態であることをカミングアウトした時の対応としては至極当然じゃないかしら？ あんたもそう思うでしょ、大吾?？」

女子生徒が携帯電話をポケットに戻しながら、呆れたように言う。

ポニーテールにまとめた黒髪に、ぱっちりした瞳と整った顔立ち。一七〇センチ近い長身にすらりと長い手足、おまけに抜群のスタイル。

成績は常に学年で上位をキープしており、運動神経も抜群。さらには料理・裁縫さいほう・掃除・洗濯と家事全般に至るまで全てをそつなくこなす。

そんな彼女の名は水瀬志保。みなせしほこの私立五月治学園第四六代生徒会長を務めている、パーフェクト美少女だ。

天は人に二物を与えずと言うが、もしそれが本当なら、彼女は天に愛されているとしか言いようがないだろう。

「いや、そう思うでしょと言われても……」

一方、そんなパーフェクト生徒会長を補佐する立場にある生徒会副会長——早川大吾は冷や汗を流しながらそう答えた。

ちなみに、志保は生徒会長であるだけでなく大吾にとってはおさななじ幼馴染みにもあたる。

特別イケメンでもなければ頭がいいわけでもない自分が副会長に指名されたのはそういう事情があるからだ。

「ちなみに志保。一応言っておくが、さっきの叫びは俺が変態であることをカミングアウトしたわけではない」

「じゃあ、何なのよ？」

怪訝そうな表情を浮かべる志保。

大吾は「ちっちっち」と人差し指を小さく振り、

「あれは俺の妹愛だっつつっ!!」

「……………」

「待て！ 無言で携帯電話を取り出すのはやめろ！」

ポケットから再び携帯電話を取り出した志保を慌てて取り押さえようとする。だが、そんな大吾を見た志保はにっこりと笑みを浮かべ、

「心配しないで。警察に電話するわけじゃないから」

「え？ そうなのか？ なんだ、それなら……」

「呼ぶのは救急車よ」

「それもやめてくれ！ 別に頭がおかしくなったわけじゃない！」

単に一一〇番が一一九番に変わっただけだった。

「冗談よ、冗談。本当に電話するわけじゃない」

志保が肩をすくめて携帯電話をポケットに戻す。

「だよな……。警察だけでなく救急隊員の人にまで迷惑をかけるわけには——」

「あんたの頭はもう手遅れだもんね」

「そっちなよ！」

既に諦められていただけだった。

「事実でしょ。……あれ？ あんたその首どうしたの？」

凹んでいる大吾がうなだれた際、首の後ろに湿布が貼られているのに気付いた志保が尋ねる。

「ん？ ああ。これは、朝に佳奈美の部屋で——」

顔を上げた大吾は事情を説明しようとし、

「朝に佳奈美ちゃんの部屋で？」

「——挨拶をしようと思ったらその前に首を寝違えているのに気が付いたんだ！」

突如殺気立った視線を向けてきた志保を見て、すんでのところで緊急回避。

危なかった……。一人っ子の志保は佳奈美のことを自分の妹のように大事に思っている

のだ。もし、うっかり朝の出来事を話してしまっていたら、今頃自分はもうこの世にはいなかったかもしれない。

「……まあいいわ。今回は見逃してあげる。そろそろ入学式が始まる頃だしね」

腕時計に視線を落として志保が言う。と、

「何いつ!？」

突然、大吾が勢い良く立ち上がった。

「それはまずい！ せっかくの計画が台無しになってしまう！」

「え？ 計画？」

「さあ、行くぞ生徒会長！ 生徒の模範もはんたる俺達が遅刻するわけにはいかん！」

「ちよ、ちよっと待ちなさい！ 計画って一体……!？」

嫌な予感を感じ取った志保が大吾を呼び止める。が、

「いざ、入学式へ!!」

そんな志保を無視し、大吾はあっという間に生徒会室を飛び出していった。

「あっ、コラ！ 待ちなさいってば!!」

志保も大急ぎでその跡を追う。

目指すは体育館。
いよいよ新しい学園生活の幕開けだ！

時は四月一日、春。

柔らかな陽射しが吹き抜ける風に温もりを与え、長い冬の眠りから覚めた植物達が芽を吹き、新たな始まりを予感させる、そんな季節。

私立五月治学園の体育館では、教師と来賓^{らいひん}、そして新入生の保護者達が主役の登場を今か今かと待ち続けていた。

「この雰囲気……懐かしいな。去年の俺達もこんな感じだったんだろうな」
生徒会役員代表として舞台上にいる大吾が、同じく代表として隣に座る志保に言う。

「そうね。あれからもう一年も経つのかぁ……。まさか、一年後に自分が新入生に挨拶する立場になっているなんて、想像もしてなかったわ」

「それは俺も同じだよ。まさか志保、お前とこうして——」
「え……?」

突然自分の名前が出てきたことに、志保が思わずドキリとして大吾を見る。

大吾は照れ臭そうに鼻の頭を掻きながら、

「ああ。まさかお前と——まだこの学園の生徒でいられるなんて」

「あんたこの学園で何するつもりだったの!？」

よほどのことがない限り学園にいらなくなることはないはずだ。

「それは、まあ……。ところで、先月の予算会議のことなんだけど——」

「なんでわざとらしく話題を変えようとするわけ!?! とても言えないようなことを計画してたんじゃないでしょうね!?!」

思わず椅子から立ち上がって詰め寄ろうとする志保。すると、

「あの二人、またやってる」

「本当、仲良いよね」

すぐ近くにいた放送委員の生徒達がクスクスと偲び笑いを漏らしていた。どうやら今までの会話を聞かれてしまったらしい。

志保はすぐすこすこ席に戻ると、小声で恨めしげに言う。

「も、もう……。あんたのせいで恥かいちゃったじゃないの」

「俺のせいだよ」

「そうに決まってるでしょ。あんたが『お前と』なんて言うから、あたしはてっきり……」
そこで、志保ははっとして言葉を止めた。

「てっきり……なんだ？」

大吾が怪訝な顔で聞き返す。

「そ、その……」

すると、志保はなぜか突然顔を赤くしてもじもじし始めた。

「その？」

「っ、つまり……」

「つまり？」

「……ああ、もういいわよ！ それよりも！」

いつもの表情に戻った志保がぐっと大吾に詰め寄る。

「さっき言ってた計画って何なのよ？」

「ん？ 何のことだ？」

「どぼけないで。さっき生徒会室で言ってたやつよ。まさか、これも人に言えないようなものなんじゃ……!!」

「落ち着けて。大丈夫だ。そんなもんじゃない」

「じゃあ、言ってみなさいよ」

志保の表情がさらに険しくなる。

これ以上の説教は遠慮えんりょしたかったので、大吾は降参するように両手を挙げた。

「佳奈美がうちに入学するって話はしたよな？」

「知ってるわよ。もうかれこれ五十回は聞いたわ」

「そうだったか？」

「五十回以上話しても記憶に残ってないあんたの頭って……」

志保が残念な人を見る目で大吾を見る。大吾はこめかみに冷や汗を浮かべた。

「……まあ、そんなことはどうでもいい。本題はここからだ」

大吾は顔を俯け、志保にしか聞こえないように声のトーンを抑えた。

「佳奈美は中学三年間、あまり友達が出来なかった。……例の体質のせいだな」

「……………」

その言葉を聞いて、志保も大吾と同じように顔を俯ける。

「俺達が中学を卒業してから去年一年間。佳奈美には本当に寂しい想いをさせたと思っ。休み時間も昼休みも下校中もずっと一人で……くそっ……」

大吾は一瞬悔しそうに唇を噛んだ後、後ろ向きになった思考を振り払うかのようにぐつと顔を上げ、強い決意のこもった瞳で宣言した。

「俺は高校生になった佳奈美にもう寂しい思いはさせたくない！ だから決めたのだ。佳奈美が同じ高校に入ったら、多くの友人が出来るようでき得る限りのことをしようと。名付けて『友達一〇〇〇人出来るかな大作戦』だ！」

「うち、全校生徒合わせても六〇〇人くらいしかいないんだけど……」
「……………」

鋭いツツコミを受けて微妙な表情で固まる大吾に、志保は苦笑した。

「……あんたって、本当に佳奈美ちゃんのことを可愛いのね」

「当たり前だ。この宇宙でたった一人の妹だぞ？」

にと笑い、力強くそう答える大吾。

そんな大吾に志保は呆れたような——それでいてどこか優しい笑みを浮かべた。

「まあ、そういうことならあたしも協力するわ。でも、くれぐれも無茶はしないように」

「心配するな。入学式の邪魔をしたりはしない」

「ならいいけど……」

疑りの視線を向けながらも、志保は一応協力を約束する。

実際、いい案だと思った。

ここ五月治学園は市内でも有数の進学校で、大吾達が通っていた公立中学とは比較にならないほどレベルが高い。

去年ここに合格したのは大吾と志保の二人だけだったし、今年は佳奈美しかいないと聞いている。つまり、中学時代の知り合いは一人もいない。

心機一転やり直すには最適な環境だ。

「そうだ、入学式が終わったらさ——」

志保がそこまで言いかけた時、吹奏楽部のトランペットの音が体育館に響き渡った。

いよいよ、主役の登場だ。大吾と志保は姿勢を正して体育館の入り口へと視線を向けた。

マーチ風にアレンジされた校歌の演奏に合わせて、新生が続々と体育館に入場してくる。

その列の中にいる佳奈美は緊張のためか行進がややぎくしゃくしており、いつもは可愛い顔も今は足元に向けられてよく見えなかった。

「佳奈美ちゃん、大分緊張しているみたいね？」

周囲に聞こえないよう、志保が大吾に耳打ちする。

「ああ。そうみたいだな」

「大丈夫かしら？ 転んだりしなければいいんだけど……」

「確かに。心配だな」

「……………？」

志保の耳打ちに対して、落ち着いた声で受け答えをする大吾。

そんな大吾に、志保は強烈な違和感を抱いた。

佳奈美が困っている状況だというのに、妙に冷静だ。いつもなら真っ先に飛び出しているって、恥も外聞もなく手を握って励ますくらいのはしそうなのに（もちろん、その場合は全力でしばき倒すつもりだったが）。

嫌な予感がする。というより、嫌な予感しかしない。

「……………何を企んでるのよ？」

志保が口調を厳しくして尋ねる。

「しつこいな。お前の言う通り、副会長として真面目に式に出席しているんじゃないか」

「それが怪しいって言ってるの。あんたがあたしの言うことを素直に聞くなんで、あり得ないわ」

「それが小学校以来付き合いのある幼馴染みの言葉か……………？」

「あんたに彼女が出来るくらいあり得ない」

「前言撤回。^{ていかい} やっぱお前は小学校以来付き合いのある幼馴染みだ」

大吾がしょんぼりと肩を落とす。まあ、否定はできないのだが…………。

「で、結局何を企んでるの？ さっさと吐きなさい」

「だから、何もないっての。いいか、よく考えろ。佳奈美の人生でたった一度しかない高校の入学式だぞ？ 俺がそれを自ら台無しにするような真似をするわけがない。むしろ、一生の思い出にしてやりたいと思うくらいだ」

「……………まあ、言われてみればそうかもね…………」

真面目な顔でそう力説する大吾に、志保もひとまず引き下がる。

確かに、ここで派手な動きを見せて大吾の悪評が新入生の間で広まりでもしたら、その妹である佳奈美が友達を作るのは難しくなってしまう。

いくら大バカで非常識な大吾でも、そのくらいのことにはわかるだろう。

「……………いいわ。とにかく、余計な動きを見せないでよね」

「心配しすぎだ。この席から一步も動かん」

なおも疑りの視線を向けてくる志保に、大吾は毅然とした態度で応じる。
新入生は既に全員着席しており、いよいよ入学式が始まるうとしていた。

「起立。礼」

放送委員の女子生徒のアナウンスに合わせて新入生、教師、来賓、そして大吾と志保が立ち上がり、深く礼をする。そして「着席」の声に合わせて再び席に着いた。

「それでは、これより第六七回私立五月治学園入学式を始めます。まず、初めに校長先生による祝辞を……」

入学式が何事もなく始まり、その後も来賓の祝辞、校歌の斉唱が滞りなく行われる。残るは新入生代表による挨拶と生徒会長の祝辞、閉幕宣言のみだ。

これまでに大吾が動き出す気配はまったくなかった。

五月治学園は戦前からの長い伝統を誇る高校だ。それだけに、入学式は良くいえば厳かに、わかりやすく言えば退屈になりがちである。

しかし、大吾は居眠りをすることもなく、至極真面目な顔で校長や来賓の話聞き、きちんと校歌を歌っていた。

どうやら、入学式が始まる前に抱いていた不安は志保の杞憂だったようだ。

(ま、こいつも副会長になったわけだし、少しは立場を弁わきまえたってことかしら……)

立場は人を変えられると言われるが、それは大吾にも当てはまることだったらしい。これな

ら副会長に指名した意味も少しはあったというものだ。

これでシスコン体質もおおつてくれれば言うことないんだけど……。まあ、そこまで言うのは贅沢つものよね。けど、いつかは……。

などと志保が考えていると、

「それでは、これより新入生代表による宣誓せんせいを行います」

アナウンスが次の項目への移行を告げた。

首を小さく振って、妙な思考を振り払う。

いけないいけない。きちんと入学式に集中しないと――

「新入生代表。一年D組、早川佳奈美さん」

「……は、はひっ!?!」

体育館に響き渡った放送委員のアナウンスに応えたのは、裏返った疑問形の返事だった。

「なっ――!?!」

志保が思わず椅子から立ち上がる。

アナウンスは明らかな間違いだった。何せ、今放送委員が読み上げている書類は全て生徒会が作成したものだ。内容には事前にも目を通していいや、仮に目を通していなくてもわかる。

早川佳奈美が新入生代表であるはずがないのだ。

ならば、生徒会が作成した書類に誤記があったのだろうか。

しかし、それもおかしい。

昨日、渡す前に不備がないかどうか念入りに確認して――

「……まさか……」

先程の大吾の言葉を思い出す。

『この席から一步も動かん』

それはつまり、逆に言えば、既に動く必要がなくなっているということなのでは？
はっとして大吾を見る。

先程まで至極真面目な顔をしていたはずの大吾は――してやったりという風に口の端を邪悪に歪めていた。

「あ、あんた……何をしたのよ!」

周囲に聞かれぬよう、小声で問い詰める。

「ふっ……。書類に若干の変造じやっかんを加えさせてもらった」

人はそれを偽造、あるいは変造と呼ぶ。

「そんな……でも、書類はあたしが直接放送委員に……」

「甘いな。夜中の学校に忍び込み、職員室から鍵を拝借して放送室から書類を持ち出すことくらい俺にとって造作もなぶろあああ!!」

「自慢げに話すんじゃないわよこのクソバカアアアアアア!!」

大吾が自らの犯行全てを自白したその瞬間、志保の右拳が唸りを上げ、大吾の左頬に突き刺さった。

殴り飛ばされた大吾は舞台上を二メートルほど横滑りし、キュキュキューと耳障りな音を響かせてようやく止まる。

「くっ……絶妙な腰のひねりから繰り出される体重の乗ったコークスクリューブロー……さすがだな、志保。危うく意識を刈り取られるところだったぜ……」

赤く腫れた頬をさすりながら、大吾が上半身を起こして言う。

「まだ余裕がありそうね。もう一発いっとく?」

「ま、待て! 二発目は意識どころか魂まで刈り取りかねん! いや、待って、本当に止

めてくださいごめんなさいもうしません許してください！」

再び拳を握りしめてゆらりと近づいて来る志保に、大吾は涙目で懇願した。

「何が許してくださいよ！ こんなことしておいて……！」

「いや、これには色々複雑な事情が……」

「複雑な事情って何よ!？」

「えっと、何だ、ほら。……下底の事情?」

「多分誤字だと思うけど、どちらにしてもロクでもない事情に違いないわ!」

鬼の形相で詰め寄って来る志保に「ひええ……」と情けない悲鳴を上げて後ずさる大吾。すると、

「これはどういうことですか?」

新入生の一人と思われる女子生徒がすっと立ち上がった。

「新入生代表はわたくしと聞いておりましたが」

腰まで届くほど長い波打つ金髪に、真っ白な肌と高い鼻。それらのパーツが織り成す、まるで精巧な西洋人形のように完成された美貌を持つ美少女の青い瞳が、真っ直ぐ舞台上の大吾と志保に向けられた。

「あ、あなたは……?」

「二年D組の恵怜菜えれなフオゼリンガムパーカーです」

その名前には聞き覚えがあった。今年の新入生代表だ。

「えっと、フオゼ……ガ……?」

「……恵怜菜で結構です」

「そ、そう? では、恵怜菜さん。えっと、実は……」

志保が事情を説明しようとしたその時、

「出たな、偽者め!」

つい先程まで情けない顔をしていた大吾が突然立ち上がり、ドヤ顔で恵怜菜を指さした。
「に、偽者!? それはわたくしのことですかの!?!」

「他に誰がいる! 新入生代表を騙きだる稀代の腐れビッチ悪女が!」

「なあっ……!」

あんまりな言いように、恵怜菜が思わず絶句する。

その隙を逃さず、大吾は一気に畳み掛けた。

「仮にお前が新入生代表だと言うなら、今ここでその証拠を見せてみる!」

「しよ、証拠と言われましても……。ですが、わたくしは事前に連絡を受けております。この通り代表挨拶も考えてありますわ！」

そう言つて、恵怜菜が挨拶原稿を示す。

「ふん！ そんなものが証拠、に……？」

恵怜菜の言葉を否定しようとした大吾だったが、その原稿を見て思わず言葉を止めてしまった。

「……え？ なにそれ？」

「何つて……見ての通り代表挨拶の原稿ですわ」

目を丸くする大吾に、恵怜菜が原稿用紙の束を掲げる。

そう、束である。五枚や十枚ではない。ぱつと見ただけでゆうに一〇〇枚を超えている。

「いや、だって、何枚あるんだそれ？」

「二〇〇枚ですわ。対人関係の初歩は挨拶と第一印象なのでしよう？ 初めからナメられてはいけないと思い、気合いを入れて書きましたのよ？ 皆さんが退屈しないよう、この学園の魅力や学園生活の心得を小説形式で表現した力作ですわ！ これでわたくしの第一印象もばっちり……あ、あら？ 皆さんどうなさいましたの？」

自信満々に胸を張つて挨拶原稿自慢を語っていた恵怜菜だったが、周囲の冷めたような

視線に気が付き、急にオロオロし始めた。

「……一応、教えといてやるが、挨拶は大体五分くらいで終わらせるのが常識だぞ？」

大吾がそう言うと、恵怜菜は驚愕に目を見開いた。

「う、嘘ですわ！ わたくし、時間制限など聞いておりませんわよ!？」

「確かに厳密な時間制限はしてないが、普通は五分くらいで終わらせるんだ」

「そ、そんな……」

恵怜菜が助けを求めるように周囲を見回す。が、明らかに大吾の方が正しかったため、誰も助け船を出すことはなかった。

そんな周囲の反応を見て、自分の方が間違っていたことを悟ったのだろう。恵怜菜はかわいそうなほど顔を真っ赤にして小さくなってしまった。

恐らく、彼女なりに一生懸命やったのだろうし、恥ずかしがることはない。本来であれば、ここは副会長としてフォローしてやるべきところなのだろう。

しかし、この状況は大吾にとって願ってもないチャンスであった。

かわいそうだと思うが、この機を逃すわけにはいかない！

大吾は舞台の上で大きく両手を広げ、独裁者よろしく新入生に向かって語りかけた。

「聞いただろう新入生諸君！ こんな無知で非常識な奴が新入生代表のはずがない！ や

はりこいつは偽者！ 佳奈美こそが真の新生代表だ！」

「違っ……それは……くううっ……！」

一瞬、何かを言い返そうと口を開きかけた恵怜菜だったが、先の失態の後では何を言っても説得力に欠けることを悟り、結局、口をつぐんでしまった。

『なにになに？ 結局どっちが本物なの？』

『おいおい、何だよこれ』

新生の間にも戸惑いが広がっていく。

いける。このまま押し切れ！

「さあ、佳奈美！ 舞台上上がって挨拶するんだ！」

舞台上の大吾が視線を恵怜菜から佳奈美に移す。

恵怜菜はもう一度、抗議しようとしたが、言葉が見つからず口をぱくぱくさせていた。もちろん、書類は全て大吾が昨夜のうちに偽造したものだ。きちんと調べれば偽造だということはずぐにわかる。

しかし、生徒の自主性を重んじるここ五月治学園では、入学式も生徒会主導で行われているため、教職員や役員で新生代表の名前をしっかりと記憶している者はいなかった。おまけに、この場にはそれを調べられるだけの資料もなければ時間もない。

つまり、誰一人としてどちらの言い分が正しいか、正確な判断ができない状況なのだ。こうなってしまうえばこっちのもの。あとは言ったもの勝ちである。

さあ、佳奈美！ 今こそ輝かしい高校生活、その栄光の第一歩を踏み出すんだ！

大吾が（悪事を）やりきった顔で佳奈美を見つめる。
すると佳奈美は、

「でも、お兄ちゃん……私、補欠合格だよ……？」

『……………』

その一言に、体育館は水を打ったように静まり返った。

「……本人はこう言っておりますが？」

恵怜菜がジト目で大吾を睨む。

「くっ……」

本人が自白してしまった以上、第三者たる自分が何を言っても説得力がない。

大吾は悔しそうに唇を噛む。

「あ、あの……」

そんな中、佳奈美はとことこ恵怜菜の傍まで歩み寄ると、

「ごめんなさい！」

腰を深く折り曲げ、床に届きそうなくらい頭を下げた。

「お兄ちゃんが色々とひどいことを言ったのは謝ります。でも、多分私のことを考えてしてくれたことだと思うから、きつと悪気はないんです。だから、許してあげてください。本当にごめんなさい！」

「佳奈美ちゃん……」

自分は何一つ悪くないのに、大吾のために思って頭を下げる佳奈美の健気な姿を、志保は目をウルウルさせて見つめた。

とりあえず、入学式が終わったら大吾を半殺しにしよう。

「……はあ……」

一方、深々と頭を下げた佳奈美をしばらく見つめていた恵怜菜は、やがて疲れたような呆れたようなため息を漏らした。

「もうよろしいですわ。どうやら、あなたに悪意はなかったようですし」

「許して、くれるの……？」

「ええ。ですから、顔をお上げなさい」

「あ、ありがとう！」

佳奈美が喜色満面で顔を上げる。が、

——ばさっ！

それと同時に、恵怜菜のスカートの前が思い切りめくれ上がった。

「……………へ？」

自身の身に何が起こったのか理解できず、呆けた声を出す恵怜菜。

「——っ!!」

そして一瞬遅れて、慌ててめくれ上がったスカートを手で押さえた。

佳奈美が顔を上げた際、あまりに深く下げすぎていたため、不運なことに恵怜菜のスカート裾を引っかけてしまったのだ。

「あ、あわわわ……」

自身の失態に顔を青くする佳奈美。すると、

『おい、見えたか……？』

『いや、一瞬だけだったし……』

『こつちも角度が悪くて……』

『誰か見た奴いないのかよ?』

周囲の男子生徒の間から、そんなヒソヒソ話が聞こえてきた。

「あああああああなた……!!」

羞恥しゅうちと怒りで顔を真っ赤に染めた恵怜菜が、すさまじい眼力で佳奈美を睨みつける。

「あ、あの、違、わざとじゃ……」

わたわたと手を振って故意ではなかったことをアピールする。

だが、恵怜菜は完全に頭に血が上っていた。

「このっ……!!」

平手打ちを喰らわせてやろうと、思い切り右手を振り上げる。が、

「ご、ごめんなさい!」

「なっ——」

その平手打ちを、佳奈美は再び頭を下げることで見事に回避した。

手加減なしの全力だったため勢いを殺せず、たたらを踏んでしまう恵怜菜。そこで、

——ゴスッ!

頭を上げた佳奈美の後頭部が、不運にも恵怜菜の顎にクリティカルヒットした。

「んごおっ……!!」

およそ美少女にあるまじき悲鳴を上げ、恵怜菜がひっくり返る。

その拍子にスカートが完全にめくれてしまい、

『黒……』

『黒だな……』

某高級メーカー製の黒のレースの下着が、完全に露わになった。

「はわ、はわわわわわ……」

股を大開きにして下着を丸出しにする——もう女として色々と大事なものを失ってしまった恵怜菜の姿を見て、佳奈美の顔から血の気が引く。

「……………」

一方、恵怜菜は先程とは違いゆっくりとした動作で起き上がると、優雅な手つきで丁寧にスカートの埃を払い、

「……………ぶち殺すっ!!」

地獄の底から漏れ出したような恐ろしい声でそう叫び、佳奈美に襲いかかってきた！
「ひいつ……!!? ゝ、ゝめんなさああああああ!!」

女どころか人として完全にアウトな恵怜菜の形相に、佳奈美はたまらず逃げ出した。

「お待ちなさい！ 今すぐあなたのピーをピーしてその上ピーにピーをねじ込んでピーして差し上げますわ！」

逆上のあまり我を忘れて放送禁止用語を連発する恵怜菜。

口調だけはお嬢様風なのでなおさら怖かった。

「ふええええ……!! お、お兄ちゃん助けて~~~~~!!」

「くっ……!! 佳奈美！」

体育館を出て校舎に向かおうとする佳奈美と恵怜菜を、大吾が慌てて追いかける。

「あっ……コラ！ 待ちなさい！」

その跡をさらに志保が追いかけようとして、

「なっ……ちよ、ちよっと放してよ!!」

いつの間にか背後にやって来ていた放送委員の生徒達に羽交い締めに使われてしまった。

「会長！ この後、生徒会長による祝辞があるんです！ 新入生代表がいなくなつて、その上会長までいなくなつたら私達どうすればいいんですか!?!」

「私達だけじゃ場が持ちませんよ！」

放送委員の生徒達が涙目で志保に懇願する。こんがん

「そ、それは……でも、大吾が……あのバカが……ああ、もう！ なんで、どうしてこうなるのよ~~~~~!」

新入生代表を巡る一連の出来事に騒然とする体育館に、志保の慟哭が虚しく響いた。なげき

「この続きは1月20日発売のファンタジア文庫で！」

(C)2012 Hiroki Inaba